# 教育実習の報告

## 長いようで短い教育実習までの間

文学部英文学科４年　迫　田　綾　奈

### 教育実習に臨むまでの私

教育実習に対して、どのようなことをイメージしているだろうか。今、それに向けて何かしていることはあるだろうか。また、どんな気持ちでいるだろうか。もし、今の段階で教育実習に向けての何かしらの心構えがあったり準備をしていることがあったりするならば、それは素晴らしいと私は思う。皆さんの中には、将来本当に教職に携わりたいと思う方もいるだろう。あるいは、とりあえず免許がほしいと思っている方もいるだろう。このように教育実習に対する考え方や目的は、人それぞれだと思う。いずれにしても、大半の方が教育実習に対して何か一つでも不安を抱えていることと思う。教育実習に向かうまでは、私も同じ気持ちだった。

### ぼんやりと気付き始めたこと

３年生の秋、私は１年間の海外留学を経て帰国したばかりだった。そのため、教育実習のことについては、ほとんど何も聞いていないところからのスタートだった。周りの友人よりも教職に必要な単位が足りておらず、教職に関する情報も遅れていた。そのような何の予備知識もないままの状態で教育実習の話を突然聞かされたのである。

もちろん、その時はイメージがほとんどわかなかった。少しずつ目の前に教育実習が迫っているということは何となく理解できた。しかし、いよいよあと半年後には自分自身が実習生として教壇に立っているのだということは全く想像できなかった。さらにいえば、教育実習の話を聞いたところで自分はいったい何をしたらいいのかが正直わからなかった。周りの友人たちは自分がいなかった間にどこまで授業を受けたのだろうか。どこまで実践の練習をしてきたのだろうか。話を聞いているうちにいろんなことを考え始め、急に不安になった。

私は最初から教師になりたいと思っていた。また、教育実習に行くことは自分の中では夢への通過点だとも思っていた。だから、少しは楽しみにしていた。しかし、教育実習に向けて話が少しずつ進んでいく中で、他人に教えられるように自分で勉強しなければならないのではないか。そして指導案を書いて授業実践をする練習を一つ一つしていかなければならないのではないか。そういったことにぼんやりと気付き始めた。あっという間に時間は過ぎていき、気が付いたら授業実践の練習が始まっていた。そのような感じがしたことを覚えている。

### 自覚をしたとき

それからは、英語科教育法の授業で授業実践について考える日々が続いた。もちろん最初は右も左もわからないような気分のまま講義を受けていた。まだまだ教育実習まで時間はあるからどうにかなるだろう。そうした考えがどこかにあった。しかし、そろそろ本気で取り組んでいかなければいけないと思わせられるきっかけになったできごとがあった。

それは、３年生の10月のことであった。講義で初めて教壇に立って授業をすることになったときのことである。その講義の受講者５名で授業を行う順番を最初に決めた。運がよかったのか、それとも悪かったのか。私は１番に授業をすることになった。そして、指導案の模範と中学２年生のテ

キストのコピーをもらった。授業までの準備期間を１週間だけ与えられ、早速、指導案を書き始めた。それからは、模範とのにらめっこの日々が続いた。文法はどんなふうに指導するか。テキストの指導の仕方はどうするか。夜遅くまでいろいろなことを友人たちに相談しながら組み立てていった。

１週間後、苦労してできた初めての指導案を授業で全員に配り、不慣れな言葉遣いであわてながらも初めて教壇に立って授業をした。あれだけ準備をしたつもりであったが、いざ教壇に立つと頭の中が真っ白になった。なんとか50分の授業を終え、先生に解説をしてもらった。何と言われるか。ドキドキしながら先生に解説してもらう中で、たくさんの問題点が浮き彫りになった。指摘されたところをメモした。あっという間に指導案が真っ赤になった。初めてだから仕方のないことだとわかっていたが、真っ赤になった指導案を目の前にして、大変なショックを受けたことを覚えている。

この時、学校の先生は思っていたよりもはるかに大変な職業であるということを実感した。同時に、この初めての授業実践により、このままではいられないという思いにようやく駆り立てられた。しかし私の性格上、しっかりした目標や課題がなければ、悔しいと思っただけで終わってしまう。手遅れかもしれないと思いながらも、まずは文法の復習をすることから始めた。さらに、自分の英語の力に自信を持たせるために、TOEICの受験をはじめたのもこのころだった。

### 教科に関わる勉強を十分にしておくこと

教育実習を終えた今、勉強しようと思い立って取り組んだことは、教育実習の３週間でとても役に立ったと思う。それでも英語科に関する知識は、まだまだ足りていない。だから、自分が教えようとしている教科について、今以上の勉強をしていきたい。さらに、その知識をわかりやすく伝えるための練習も続けていきたい。

教育実習は、あっという間にやってくる。そうは言っても、教育実習に臨むまでに時間が残されているのも事実である。いつ教壇に立っても授業を成し遂げられるような十分な準備をしておきたい。

## 話し掛けることの大切さ

文学部国文学科４年　後　藤　健　太

### はじめに

私は、2010年６月７日(月)から３週間にわたって、母校の中学校で教育実習を行ってきた。担当学級(学級活動)は２年２組25名で、朝と帰りの学級活動、給食、掃除や自習の監督などを行った。教科は国語を担当し、２年生の２クラスを受け持った。授業は、国語を14回行い、２年２組において、道徳と学活を１回ずつ行った。

### 生徒指導って？

私は、教育実習に行く前から、「生徒指導とはなにか」ということを考えていた。中学、高校とそんなに真面目ではなかった私は、先生たちからよく“叱られ”ていた。殴られたこともある。そんなこともあり、私は、「生徒指導＝叱ること」だと思っていた。生徒指導の先生といえば、体育科の強面の先生であったことも、そう思う要因となっていた。そんな考えの下、私は、教育実習に臨んだのである。

３週間の実習中、先生方が生徒を叱る場面を何度も見た。叱られた生徒たちは、特に反抗することもなく、素直に聞いていた。しかし、叱られる

生徒は、いつも大体決まっていた。その時私は、叱られている生徒たちはその場だけやり過ごして、本当に大切なことは伝わっていないのではないかと、考えるようになった。

**自己指導能力の育成**

実習中、生徒指導に関わる話を、二人の先生から聞くことが出来た。

まず、生徒指導主事の体育科の先生に、学校が行っている活動について、話していただいた。私が実習を行った中学校では、保護者に対して、指導の対象となる事由（特に服装や問題行動について）をプリントで配布し、どのように指導を行うかも同時に示していた。

また、週に一回、生徒指導委員会と、いじめ・不登校対策委員会を開き、学年ごとに気になる生徒を挙げ、全校で問題を共有するようにしていた。

また、歓迎遠足や、クラスマッチなどのレクリエーションを行うことで、学校を楽しくする活動を行っていた。

つまり、私の行った中学校では、積極的生徒指導を中心に指導がされていたのだ。積極的生徒指導を行うことで、生徒の自己指導能力の育成を目指していた。これは、教職の授業でも習うため、分かっていたが、実際の現場で、どのようになされているのかを知ることが出来た。

しかし、教師たちはこのような積極的生徒指導のみで、生徒の自己指導能力の育成ができるとは、思っていない。では、どうすればいいのだろうか。

**話し掛けること**

次に話を伺った、スクールカウンセラーの方から、とても参考になる話をしていただいた。私は、スクールカウンセラーの方の仕事は、生徒の悩みを聞き、それを一緒に解決することだと思っていた。しかし、その方に、少し違うと言われた。その方曰く、「スクールカウンセラーの所にやってくる生徒には、自分で悩みがあってくる生徒もいれば、先生から行くように指示された生徒もいて、悩みを悩みとして自覚していない生徒もいる。だから、雑談などから、それぞれの悩みを引き出して、それぞれにあった『対話』をしなければならない。私のしていることは指導ではない」と言われた。

これを聞いて、私は、生徒指導に大切なものを知ることが出来た。それは、生徒と『対話』するということだ。生徒には、声を掛けてくる生徒と、掛けてこない生徒がいる。そのとき、話し掛けてこない生徒に、どんな小さなことでもいいので、話し掛けることが大切なのである。そうすることで、生徒の考えや、悩みなどを聞き出すことが出来るのだ。

**終わりに**

私は、この実習を通して、授業実践だけでなく、とても多くのことを学ぶことが出来た。特に、生徒指導に関しては、考え方の大きな転機となった。

生徒指導で「叱ること」は、とても大切なことであると思う。しかし、生徒と『対話』し、生徒自身に気付かせることがもっと大切であると、この実習を通して知ることが出来た。

私は、実習が始まった当初、生徒たちと何を話したらいいのか、全く分からなかった。しかし、『対話』の大切さを知ってからは、時間があれば生徒たちと話をするようにした。すると、生徒たちの方から話し掛けてくれるようになり、授業のときでも、沢山発言してくれるようになった。

教材研究や授業など、実践は大変である。しかし、生徒の前では、笑顔でいることが求められると思う。とにかく生徒と『対話』を重ねることだと思う。その積み重ねにより、多くのことが学べるのである。

# 私の思う「生徒指導」

文学部国文学科４年　丸　山　志帆理

## １、その難しさ

生徒とコミュニケーションをとること。これが、教育実習中に私が最も難しいと感じたことだった。指導案作成や授業、ホームルームなど教師の仕事はたくさんある。そういった多忙な職務の中で、生徒と向かい合いコミュニケーションをとることは容易ではない。一人の人間と人間がぶつかり合うのだから、ベテランの先生でさえ戸惑うことがあると聞いた。しかし、生徒と向き合うことを止めるわけにはいかない。生徒と教師の良好なコミュニケーションは授業や学級活動、行事などを円滑に進める重要なポイントでもあるのだと、実習先の先生はおっしゃっていた。

私はそういった、いわゆる「生徒指導」と言われるものの難しさの一面を三週間の教育実習で垣間見ることができた。

## ２、「自分の体験してきたことの大切さ」

私が実習に行った学校には、目立ったいじめや問題行動を起こす生徒もおらず、生徒の大半が教育実習に協力的で、授業やホームルームなどが比較的に進行しやすい学校だった。始めは緊張の表情をしていた生徒も、毎日話しかけている内に打ち解けてくれ、実習最後の週には給食時間や休み時間には笑い声が絶えないようになり、私は生徒たちと楽しく話ができることが嬉しくて、自分の楽しかった体験談や趣味の話などをたくさん話した。生徒たちも楽しくおもしろい話をたくさん話してくれた。

そんなある日の放課後、ある生徒に友達関係の悩みを打ち明けられた。その生徒のクラスは、女子の友達関係がギクシャクしており、修学旅行までにはどうにか改善していきたいと、担任の先生も悩まれていた。

相談の最後に、「先生、私、どうしたらいいかなぁ？」と、生徒に聞かれ、私は口ごもってしまった。普段、面白おかしい話ならばいくらでもペラペラしゃべれるというのに、この時の私の口からは、ほんの少ししか言葉が出なかった。そのほんの少しのアドバイスも、ごくごくありきたりな、何の解決にもならないようなものだった。きっと相談してくれた生徒もそう感じたと思う。

私は「これはいけない」と思い、先生方に相談してみた。すると先生方から、「丸山先生が今までに体験したことを感じたまま話してあげればいいんだよ。きっと生徒たちの参考になるから」と言われた。

そこで私は、中学生・高校生時代のことを思い返してみたのだが、私は人間関係でそこまで深刻に悩んだ記憶がなかった。「こんな私の話を聞いて、生徒たちは参考になるのだろうか…、というより、話せるような体験談がない」ということに気が付き、私は初めて「自分の体験してきたことの大切さ」に気付いた。

## ３、自分自身の体験と生徒指導との繋がり

悪いこと、辛いこと、暗いこと、そういう生徒の悩みにも教師は対応しなくてはならない。ただの「明るく楽しい先生」では、生徒の信頼は得られない。悪いことや、辛いこと、暗いこと、そういったマイナスの感情も受け止められてこそ、生徒は教師に心を開いてくれるのだと実感した。

悪いことはしないに越したことはないが、もし過去にそういう体験があり、それを深く反省しているのなら、その体験は自分の財産だ。生徒が同じような過ちを犯そうとした時、薄っぺらでありきたりな言葉ではなく、自分の心を込めた熱い言

葉でアドバイスすることができるだろう。

実習の際、私にはそれができなかった。だからといって、「中学生・高校生時代に悪いことをしておけばよかった」とか「荒れた人間関係を体験したかった」と言う訳ではない。私は私なりに今までたくさんのことを体験しているのだから、それをどう活かし、生徒に向き合うのかを考えていくことが大事なのだと思うようになった。

私に相談を持ちかけてくれた生徒の時のように、自分の人生経験ではフォローできない問題というものは必ずある。そんな時、必ずしも体験談から引用するのではなく、例えば本であったり、先人の言葉であったり、友人の話だったりと、自分なりに自分の人生に厚みを持たせていけば、生徒の心に届く熱い言葉で生徒に向かい合えるようになるのではないかと、私は考える。そういう技術を身につけ、生徒の心をより深く理解できる教師になりたいと、実習を終えて強く思うようになった。

たった三週間では、生徒の問題に深く携わることはできなかったが、ほんの少し垣間見た、それだけでもこんなに奥が深い。生徒指導とは難しいものだと痛感し、何よりも自分のことを深く見つめ直す良い機会になった。

### 4、これから実習へ行く皆さんへ

教育実習に行って、多少の差はあれども、生徒とのコミュニケーションの取り方で悩まない人はいないと思う。生徒に向き合った時、「自分はこうだから駄目だ」とか「自分は体験したことのないことだから、生徒の気持ちが分からない」と、やたら暗い気持ちになることがあるかもしれない。

「技術は伴わなくても、一生懸命さは生徒に伝わる」。教育実習中、私は先輩の先生にそう励ましていただいた。そして、それを信じて3週間の実習を乗り切った。生徒と向き合おうとする熱い気持ちさえあれば、実習は必ず実り多いものになると私は信じている。

## 授業実践への備えと授業計画について

文学部史学科4年　大　江　志緒里

### Ⅰ．はじめに

私は母校である中学校にて3週間の実習をさせていただいた。配属されたのは、入学したての初々しい1年生のクラスだった。

私の場合、この3週間で実際に授業を行ったのは最後の1週間での、たった4回であった。そのため、1つの授業に向けてじっくりと計画を練ることができた。ただし、私のように授業実践が少ない例は稀である。皆さんが実習を行う際は、これから私が述べることを短期間で行わねばならないことを念頭に置いていただきたい。また、私の話は社会科中心となるが、他の教科で実習を受ける方にも何かしらの参考になることと思う。

### Ⅱ．授業実践への備え

授業実践への備えは授業計画を練るための備えであり、この計画を練るに当たっての準備が重要となる。ポイントは大きく2つに分けられる。

私はまず、担当の先生の指導を基に生徒の実態を知る為、配属されたクラスの生徒に社会科に関するアンケートを行った。項目は、「社会は好きか。知っている歴史上の人物を上げてください。」など、簡単なものにした。結果を基に、現段階での1年生が社会の授業や学習に対してどのような姿勢で学んでいるかを知ることができ、授業計画を練るための備えとして良き材料となった。

次に、現場の先生方が実際にどのように授業を行っているのかを知ることも授業計画を練るために重要なポイントとなる。私は社会に限らず、他教科の授業も拝見させていただいた。授業の流れ・板書構成・生徒の反応・間の取り方などをノートに細かに記し、分析した。

## Ⅲ. 授業計画

続いて、授業計画についての考察を具体的に3点に分けて述べる。

まず、副教材としての画像の提示についてである。私が実習させていただいた中学校で特徴的だったのは、社会の授業でプロジェクターの使用が義務のように成されていたことである。多くの画像を用意し、授業の流れに沿って紙芝居のように画像を見せていた。画像を提示する間は、生徒は前だけを向き、先生の話に集中する。グループワークや板書の時間も計算されたようにテンポよく成され、授業にメリハリを持たせていた。そして、授業中は教科書をほぼ開かないというスタイルだった。

担当の先生曰く、「教科書は、予習・復習の自宅学習用で事足りる。授業では、教科書に書かれていないことまで教えないと足りない。」ということだった。確かに、昨今の教科書は写真が多く載せられ、その分、記述部分が大幅に削減され簡潔な内容となっている。現場の先生方がおっしゃるには、教科書だけでは授業が成り立たないのだそうだ。勿論、副教材として資料集などもあるが、これもまた自宅学習用であるのだろうと私は考えた。

このように、教科書を開かない授業を成立させるには生徒自身が予習をしてくることが絶対条件となる。予習をしてこなければ、授業がわからない上に、先生の質問にも答えられない。つまり、教科書を予習・復習用とし、毎回の授業に予習を欠かさない習慣を身につけさせれば、自然と学習習慣も身につく。授業では、教科書にプラスした内容を教わる為、一石二鳥どころではない。

次に、「めあて」の重要さについて述べる。授業では、先生1人が話している訳にはいかない。授業の始めには、授業全体のテーマとなる「めあて」を立てる。そこから、生徒に小さな問いかけをし、生徒はそれについて考え答える。その答えが次の問いかけに繋がる、というように繰り返していき、授業の最後には「めあて」の答えに辿り着くというような授業構成となる。

最後にもう一つ、このような授業を行うために準備が必要となるのが「発問計画」である。「発問計画」とは、授業で行う問いかけをまとめたものである。授業の流れをスムーズにする為、問いかけに対して、次の問いかけへと繋がる答えを生徒から導かないといけない。返ってくるであろう答えを予想しながら、どの言葉を使えば生徒が答えやすいかを考えながら計画した。勿論、予想もしない答えが返ってくることのほうが常である。臨機応変に対応できるようになるには、準備を万全にするに越したことはない。

授業の際、発問を多く行うことになる。指名は、名前順・席順・挙手制というようにその時々で変えると良い。生徒は程よく緊張しながら、いつ当てられてもいいように集中して授業に臨めるため、私は良い方法だと考える。

## Ⅳ. おわりに

これまでに述べてきたことは、授業を行うに当たっての準備や計画の段階についての一例である。私は、準備・計画共に多くの時間を費やした。試行錯誤しながら何度も計画を練り直した。できた計画は、1対1で担当の先生と模擬授業をしたり、1人でも練習したりした。しかし、いくら準備や計画を完璧のようにしても、実際に授業を行うとなると、思ったようにいかないことが常である。準備・計画だけで満足せずに、どんな状況に

も対応出来うる心構えで臨むと良いだろう。

皆さんが授業計画を立てる際も、いろんな方の授業の方法を分析した上で、オリジナルの授業というものを組み立てていって欲しい。

## 授業実践にのぞむこと

食物栄養科学部食物バイオ学科4年　福　永　真　弓

### はじめに

私は、母校の高等学校で高校生物を担当し、計17日間実習をさせて頂いた。授業担当クラスは２年生と３年生の普通科の２クラスを受け持った。どちらも、進学系のクラスで45人前後。女子が多く、理科嫌いの生徒が大半で初めは授業に興味・関心を引かせることが大変であった。実験・観察もあまり経験がなく、一斉授業形式で、ただ板書を写すだけというスタイルが出来上がっていたため、正直、やりづらい雰囲気の中で授業をスタートさせた。

授業を行う前に、担当の先生からは「板書計画だけ毎回の授業の度に提出してくれればいい」と言われたが、自分の授業の流れを確認するために、毎回、指導案の略案（主に授業展開部分）を提出していた。

初の授業は、２年普通科ＡＢ組で行った。他の教科と違って、理科や社会科という科目は、２クラス合同で行われることがあるため、各々のクラスの持つ雰囲気や学習意欲が異なるので、授業の進み方や内容の精選にかなりの時間をかけて教材研究を行った。

### ２年普通科ＡＢ組での初授業

しかし、初の授業は緊張していて説明が上手くできなかったり、生徒を向いて話せなかったりと・・・反省点がいくつも残る授業になってしまった。私は、理科教育法等の講義や、本学の模擬授業の会で計４回、実習に行く前に模擬授業を行っており、人前に立って話すことに抵抗はなかったが、いざ45人の高校生の前に立つと足が震えて、そこに立っているだけでやっとの思いだった。この時、今までの授業に対する自信は、過信になっているということに気が付いた。

もっとひたむきに自分の中で満足せず、生徒の目線で授業を組み立てていかなければ、今後、自分は成長しないのではないかと思い、担当の先生から受けた数々の反省点を基に一から授業内容の精選と工夫を凝らしていった。工夫した点は、主に３点。

### 工夫した点と教材研究に打ち込んだ時間

１つ目は、板書は見やすく、大きく図を書き、色チョークを上手く使い、メリハリをつけること。

２つ目は、座学の授業なので、できるだけ生徒の学習活動を増やすということ。資料集（図録）やプリントを作成してきて、よく見せて書き込ませるなどといった、目と耳と手を動かせるようにして、興味・関心を引きだすようにした。

３つ目は、教科書や図録に出てくる用語は、細かくチェックして、１つの用語に対してスラスラと説明ができるように、事前に調べておくということ。

以上を計17回の授業で徹底して行った。教材研究は、どんなに他のことで忙しくても、１つの授業に対して３時間は費やしていた。毎日、６時半に登校して下校は夜の９時を回っていた。そして、帰宅後は早くて２時に就寝。遅い時は、４時といった生活リズムで３週間過ごした。これに、学校の庶務や部活動までこなさなければならない先生方は、本当にすごいと思った。よっぽど、この仕事を好きでないと続かないことだと思う。

### 3年普通科BC組で得られた自信

そして、実習2週目から3年生の普通科BC組でも授業を行った。自分の専門外の内容だったため、より教材研究を行い、生徒に教えながら自分も勉強するといった感じで取り組んだ。このクラスの生徒は、進学クラスでもほとんどが推薦で大学に進学することや専門学校に進むことを考えている生徒たちだったので、受験で生物を必要としないため授業に対する意欲が非常に低く、ほとんどの生徒が授業中に居眠りをしていた。3年生の6月という大事な時期でもあったので、定期テストに備えた学習に取り組ませた。そして、授業に興味・関心を持ってもらうために、時折、雑談を加え、生徒の日常生活に関連がある内容に触れる時は、予備知識や雑学の話などを入れて、できる限り生徒を授業に参加させるようにした。努力の甲斐あってか、生徒たちは少しずつ授業に興味を持ってくれ、休み時間に質問もしてくれるようになった。そして、徐々に生徒たちともコミュニケーションをとれるようになってきて、辛いながらも日々の変化に楽しさを覚えるようになってきたのがこの頃であった。

### 2年普通科AB組での研究授業

しかし一方、研究授業を実施するクラスである2年普通科AB組とは、なかなかコミュニケーションをとることができず、生徒はどこが理解できて、どこが分からないのかが、分からない状況が続き、このままだとこの生徒たちに、何の影響力も与えられないまま実習が終わってしまうと恐怖さえ感じた。

そこで、2週目からの実験・演習の準備をとことん突き詰めて行い、実験器具に漏れがないように細心の注意を払い、44人の顕微鏡観察実験に臨んだ。すると、今までの座学の授業の何倍もの集中力と好奇心をひしひしと感じることができ、ここまで準備してきた甲斐があったと嬉しく思った。そうして波に乗り、どんどん実験に生徒たちがのめり込むようになり、そのまま研究授業に持っていくことができた。

研究授業前は、何度も事前に予備実験を行い、失敗ばかりを繰り返し…研究授業前の1週間はほとんど帰るのが10時を過ぎるといった感じで担当の先生は、自分の仕事もそっちのけで、私の研究授業の準備に時間を費やしてくださった。その結果、『研究授業の花粉管の伸長実験』では、今までで最も良い実験ができた。

そして、何よりも嬉しかったことは、研究授業後の座学の授業に戻った時の生徒たちの学習意欲の高まりであった。普段、練習問題等のプリントを宿題に出しても、大半の生徒が提出をしないのに、今回の実験で踏まえた考察課題のプリントは、各々が答えを書いて次回の授業に臨んでくれていて、授業時も誰一人として居眠りする生徒はおらず、真剣に耳を傾けてくれた。この時に、実験・演習の大切さが身にしみて分かった気がした。

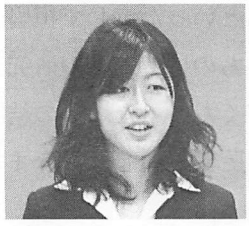
### 授業実践にのぞむ（臨む・望む）こと

理科において、実験・演習がどんなに興味・関心を持つのか、生徒たちの好奇心や学習意欲を上げる最も重要な材料になると考えることができた。だからこそ、手間や時間、コストがかかっても、その準備や予備実験を怠らずに取り組まなければならないと強く思うことができた。

最後に、授業実践において私は、何が一番大事かと聞かれたら、それは『生徒に対する思いやりを持つことによって、生徒観が見えてくる、そのクラスに合った授業を生徒目線で組み立てる、そのための惜しまない努力が教師には必要である』と答える。

# 指導教諭と私

文学部史学科４年　岡　本　幸　恵



## Ⅰ、はじめに

教育実習において、実習生には指導をしてくださる先生が少なくとも一人はついてくれる。そうした指導教諭は、学校側が決めるため、実習が近くなるまでわからない。高校に実習に行くと自分が在学していた時の先生が多くいらっしゃって懐かしいことばかりだ。

教育実習では、生徒、同じ実習生、先生方など様々なところから何かしら得るものがある。何かを得られるかどうかは、本人の意思次第であると思う。

私は、指導教諭との関係について多くのことを学んだ。

## Ⅱ、厳しい先生

### ・コミュニケーションの不成立

私の担当の先生は、10年間私立高校で教師を続け、平成22年度から公立高校の新採用になった先生だった。もちろん初対面だったため、まず私を知ってもらうこと、仲良くなることを目標にした。しかし、なかなか思うようにコミュニケーションは取れなかった。あまり会話を好んでもらえず、自分が行動しなければ何の指示もなかった。親しい先生が指導教諭となった他の実習生は、先生からの指示で動いていたが、私にはその指示もなかった。そのため、周囲の動きを見て自分のすべき行動を考え、指導教諭にミーティングのお願いをすることから始めた。

### ・授業実践回数の交渉

はじめのミーティングでは授業を一度しか、させてもらえそうになかった。しかし、私は本気で教師を目指す上で多く授業を行いたかったため、数回お願いをしにいった。自分が本当に教育者になりたいこと、やる気は誰にも負けないことを伝え、どうにか10回の授業をさせてもらうことになった。

### ・真っ赤になった指導案

さらに、指導案は必要ないと言われたが、私自身練習がしたかったので、自分で作成した指導案を提出し、無理に添削をお願いしにいった。指導案はいらないと言われたが、添削では４，５回真っ赤になった指導案が返され、一枚完成するのに大変時間がかかった。添削方法も、ただ線が引いてあるだけで、何が悪いのかは自分で考えて、その部分を直していく必要があった。

### ・多くの逆質問

また、わからないことを聞きに行くと、逆に多くの質問をされ、答えは自分で探すしかなかった。しかし、社会人になると始終教えてもらえることはないし、教育実習とは、そもそも私たちがお願いする立場にあって成り立っているものだ。そのように捉えると、自分で行動するという事は、実は当たり前の事なのだと感じた。

## Ⅲ、「泣きごと言わずによく頑張った」

このように、私は思ってもみなかった事で壁に当たり苦労したが、甘えてしまったら教育実習に行く前の決意が崩れてしまうし、何も得ることができないままに終わってしまうと思ったので、自分にできる限りの行動をした。

他にも、私は口だけだと思われないために、指導教諭よりも前に出勤し、朝のあいさつを一番に行い、自分で一日の予定を予め組み、打ち合わせもお願いしにいった。帰りは、一日のお礼をして、指導教諭よりも後に帰宅した。さらに、授業は、一つの内容につき一度しか実践できなかったため、自分で納得のいく授業になるまで、繰り返し

空き教室で練習を行った。

最後の授業まで、決して褒められることもなく、話しかけられることもなく、笑うこともなかった指導教諭が、研究授業後の社会科反省会で、初めて笑ってくれたこと、「最後まで泣きごと言わずによく頑張ったね」と声をかけて頂いたことは、涙が出るほど嬉しかった。

その瞬間まで、認められることは決してなかったが、私の板書や授業方法においては、私のやりたい授業を尊重してくださる先生でもあったため、どうやったらもっと自分の目指す授業になるのかを日々考えることができたのも事実だ。

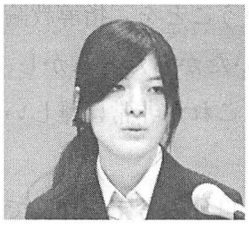
### Ⅳ、おわりに

私はこの教育実習で、その先生から多くの事を学んだ。それは、自分の意思を強くもって決めたことをやりぬくこと、また、当たり前のことに自分で気づき行動することだ。はじめは、どうしよう、と思うほどコミュニケーションもうまくとれなかったが、自分がどうしたいのか、をアピールし、認めてもらう努力をすることで自分自身を見直すことができた。今すべきことは何か、自ら考え行動することが自分自身の成長にもつながったと思う。

今では、高校にあいさつに行くと、その先生から話しかけてくれる。実習中にその先生が何を見ていたのか…。それは、私自身の意思と行動力を見ていたのだと思う。

## 生徒と真摯に向き合うこと

文学部国文学科４年　永　松　ますみ



### 一番の目標

教育実習が始まる前日、私の胸は不安よりも期待にあふれていた。大学３年のときから本気で教師を目指すことを決めていたため、「夢への第一歩」となる教育実習に対して、非常に強い思いを抱いていたのだ。特に、実際の中学生と関わることは、私にとって最大の期待であり、同時に最大の不安でもあった。だからこの日、「生徒と裸の心で向き合い、一人一人のことをしっかり理解するよう努めること」を教育実習の一番の目標として固く心に誓った。

### 十人十色大作戦

実習が始まったばかりの頃は、生徒の心をなかなか開くことが出来ず悩んでいた。しかしその後、私のある試みが功を奏し、私と生徒たちの距離が一気に縮まることになった。

その試みとは、生徒にそれぞれ好きな色の折り紙を配り、生徒自身の簡単な自己紹介や私への質問などを書いてもらう、というものである。「一人ひとりのことをもっと理解したい」という思いからの試みであった(題して「十人十色大作戦」)。すると、この試みを行ったその日から、生徒の方から歩み寄ってくれるようになっていったのだ。私の“心から向き合いたい”という思いを、生徒の方も感じ取ってくれたのだろう。

この経験から、「生徒は、教師を映し出す鏡なのかもしれない」と思った。

**授業実践　～臨機応変さ～**

実習当初は、あらゆる教科の授業を観察させていただいた。先生方の授業の進めかたや発問のしかたはもちろん、生徒が授業を受けている様子を特に観察するよう心がけた。“授業づくりでの一番の基本は生徒理解だ”ということを、指導教諭や大学の先生方から学んでいたからだ。しかし、実際に授業実践が始まると、これが非常に難しいということが分かった。

３年生の説明文の授業で、自分の考えを作文で書かせているときのことだ。机間巡視をしていた私は、作文が苦手なある生徒が思い悩んでいたので、クラス全体に向かって「例えば、～という考えもある」とヒントを出した。すると、私のその言葉を聞いて、自分の考えをスラスラ書けていた他の生徒たちが、いっせいに自分の文章を消しゴムで消し始めてしまったのだ。

授業終了後に、私は指導教諭にこう指摘された。「ああいう場合は、出来ていない子だけにそっとヒントを出した方がいい。さっきのように全体にヒントを出してしまうと、書けている子は自分の答えに自信がなくなり、消してしまう。それに、『ヒントがなくても自力で分かるのに…』と思う子もいる。その時々の状況を把握して、その場に合った対応をしなければならない。」

授業では、生徒が置かれた状況も一人ひとりの様子も常に変化する。そのため、教師はいつも臨機応変に対応しなければならないということを、実践での失敗から学ぶことができた。

**生徒本位　～職員室での会話～**

教育実習生は、実習とは言え期間中は教職員の一人であり、一教職員として職員室に出入りし、職員朝会にも出席する。初めて教員として学校に身を置いたため、日々緊張感があった。間近で先生方を観察していると、その仕事量の多さには本当に驚かされた。雑務は常に絶えることがなく、先生方の机の上には常に仕事が山積みになっている。しかし、そんな環境の中で気づいたことがあった。多忙な中でも、職員室で交わされる会話は、ほとんどが生徒についての話題である、ということである。

どんなに忙しそうにしているときでも、「○年の～さんの進路は…」、「～くんは今日、朝から元気がなかった」、「～さんは最近毎日学校に来るようになった」など、生徒についての会話のない日はない。しかも、先生方が仕事の愚痴をこぼしている姿を見たことがない。そんな様子を見ていて、教師はいつでも「生徒本位」なのだということを感じた。

私がある先生に「いつお休みになっているのですか」と伺うと、その先生は「生徒の変容や成長が見えたときの喜びは何ものにも代えがたいから、やっていけるんだよ」とおっしゃった。この言葉は、教師の多忙さに圧倒されていた私の心に大きく響いた。

また、驚いたのは、３年生の席替えを行ったときのことであった。ほんの５分間ほどであったにもかかわらず、その後職員室に戻った担任の先生が、「○○はまた○○の近くになっていた」、「珍しく○○は席替えの後ニコニコしていた」など、一人ひとりの生徒の様子を覚えていらっしゃったのだ。

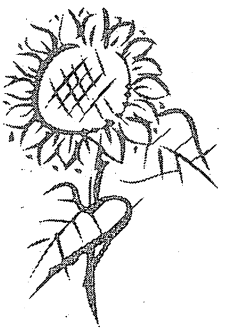
私は、“担任は、生徒の細かい観察ができなければならないのだ”と感じ、非常に感心した。

**生徒と真摯に向き合うこと**

「教師には、生徒の成長に真摯に向き合う姿勢と、生徒に対する愛情が不可欠だ。」

私はこの３週間の実習を終え、そんなことを感じた。学校は、何においても生徒が第一である。このことを教えてくださった実習校の教職員の皆さんと生徒たちには、深く感謝している。おかげで、「生徒のすこやかな成長に携わっていきたい」

という思いをよりいっそう強くすることができた。自分自身が成長し続ける意欲を忘れずに、教師への道をひたむきに歩んで行こうと思う。

「生徒と裸の心で向き合い、一人一人のことをしっかり理解するよう努めること。」

このような気持ちで臨んだ3週間の教育実習は、生涯忘れることのできない経験となった。